HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	森永貴子著 『ロシアの拡大と毛皮交易16〜19世紀シベリア・北太平洋の商人世界』
Author(s)	佐々木, 史郎
Description	書評
Citation	北方人文研究, 2, 101-105
Issue Date	2009-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38241
Type	departmental bulletin paper
File Information	06_p101-105.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

〈書評〉

森永貴子著
『ロシアの拡大と毛皮交易 16〜19 世紀シベリア・北太平洋の商人世界』

佐々木　史　郎
国立民族学博物館

本書はロシアの東方進出の歴史を、毛皮交易の盛衰とそれに携わる商人たちの動向を柱にして丹念に描いた優れた概説書である。日本ではロシアの東方進出を、ヨーロッパにおける毛皮需要とその資源の探索に絡めて論じることが多かった。また、帝政ロシアのチュルク、モンゴル、ツングース、古アジア系諸民族の土地への侵略の原動力が毛皮資源にあり、毛皮交易がロシア帝国繁栄の礎となっていたということは以前から指摘されていた。しかし、毛皮交易に関する研究は、著者も引用する木村和男氏の一連の著作(木村 2002、2004、2007)にあるように、アメリカ側からのヨーロッパ人の進出の歴史が中心であり、ロシア側で毛皮商人たちがどのように資源を開発し、生産された毛皮をどこに売って、どの程度もうけてきたのかについてはほとんど知られていなかった。本書はその核心部分に果敢に挑戦した画期的な本である。

本書は第 1 章でまず帝政ロシアと日本との出会いから話を始める。17 世紀末のアトラーソフのカムチャツカ遠征の際に「発見」され、モスクワに連れて行かれた伝兵衛（デンベイ）が、ロシアが日本人であることを意識して出会った最初の日本人とされる。その後、薩摩出身の宗蔵（ソウザ）と権蔵（ゴンザ）がカムチャツカに漂着し、さらに南部の多賀丸、そして大黒屋光太夫らが乗った伊勢の神昌丸と日本船のカムチャツカ、アリューシャン方面への漂着が続き、ロシアは彼らを通じて日本に関する情報を蓄積させていった。そして、大黒屋光太夫を乗せたエカテリーナ号が根室に到着することで、ロシアと日本との最初の政府レベルの外交交渉が始まる。

その後、レザノフを代表とする使節の長崎来航と交渉の失敗、ゴロヴニン（ゴローニン）事件と紆余曲折を経ながら、最終的には 19 世紀中期の日露和親条約、日露通好条約の締結でもって政府間レベルの国交が樹立されることで、帝政ロシアと江戸幕府の日本との外交交渉は一応の決着をみる。

この日露国交樹立に至る経緯は、これまでも日本史の中の外交史あるいは北方史のレベルでたびたび議論されてきた（和田 1991、秋月 1998)。しかし本書の場合、その後に続く章を読むことで、この 17 世紀末以来の日本との出会いも、ロシアの東方進出の終着点の一つだったということを否応なく意識させられることになる。つまり、本書は日露の外交樹立までの歴史をロシア側から見ることで、従来の日本史学における議論を相対化するのである。

第 2 章以下は、その日本との出会いをもたらしたロシアの東方進出の過程を丹念に追跡していくことになる。ただし、その過程を政治史としてではなく、東方進出を経済的に支えた商人たちの軌跡を追うことで、政治史とは異なる視点から描こうとしている。第 2 章ではイワン 4 世（雷帝）の

時代に始まるコサック等を利用した東方進出の開始から、シベリアへの侵略の拡大、中国清朝との激突、そしてネルチンスク条約（1689年）とキャフタ条約（1728年）の締結へと展開する。そして清とのこの2つの条約がその後のロシアのシベリア経営と北アメリカへの進出にとって重要な意味を持つことが論じられる。すなわち、ネルチンスク条約でアムール川を通って東アジア世界に接近するルートを奪われたロシアは、オホーツク海をわたってカムチャツカ半島に進出し、そこを起点としてさらに2方向に拡大を続ける。一方は東へ向かってアリューシャン列島からアラスカへと進み、もう一方は、南西方向に向かって千島（クリル）列島を経由して蝦夷地に接近し、そこから日本との接触を試みるわけである。第1章で述べられた日本との邂逅は、いわばネルチンスク条約の副産物でもあった。

清とのもう一つの条約であるキャフタ条約は、経済的な側面ではネルチンスク条約以上の重要性を有していた。この条約で規定された国境貿易（キャフタ貿易）によって、ロシアはシベリア産毛皮の新しい輸出先を得たのである。18世紀の時点ではすでにヨーロッパへの毛皮輸出は衰退しており、ロシアの毛皮商人たちは新しい販路を求めていた。清朝支配下の中国はヨーロッパ以上の巨大な毛皮消費地であり、ロシアにとっては恰好の輸出先となったのである。そして、このキャフタ貿易に参入し、それを主導することでイルクーツクを拠点にしたシベリアの商人たちの力が急成長した。ロシアのアメリカ進出は彼らの力によるところが大きい。しかし、露清両国の関係は安定していたわけでなく、清はしばしば口実を設けて貿易を中断した。その中断はロシアの毛皮商人たちにとっては死活問題であり、キャフタ貿易の動向は、その後のロシアの北アメリカあるいは北太平洋地域に対する政策に大きな影響を及ぼすことになる。

第3章ではロシアの北太平洋進出とイルクーツク商人の活躍が論じられる。この章の主人公はアラスカに拠点を築き、ロシアの北アメリカ進出のパイオニアとしての役割を果たしたＧ・Ｉ・シェリホフである。彼がＩ・Ｒ・ゴリコフ、Ａ・Ｅ・ポレヴォイらと創設した会社（ゴリコフ・シェレホフ商会）は、彼の死後イルクーツク商人らの思惑を乗せて『ロシア・アメリカ会社』へと発展する。その過程が述べられているのが第4章である。

ロシア・アメリカ会社というと、ロシアのアラスカ、アリューシャン列島、千島列島進出のために作られた国策会社で、イギリスやオランダの東インド会社に匹敵するような組織というイメージで捉えられがちだが、本書の著者の綿密な研究から、決してそのようなものではなかったことを知ることができる。この会社はあくまでもイルクーツクの商人たちの力で結成され、アラスカでの毛皮獣猟と毛皮取引のための特権をロシア帝政政府から与えられていたものの、決して政府の政治的、軍事的保護下にあったわけではなかった。毛皮獣の狩猟と取引において搾取と使役の対象としていた先住民の側からの反撃を食い止めるために必要不可欠な軍事力も、会社が自前で調達しなければならず、また、貿易相手も自分たちで探し求めて行かなくてはならなかった。著者が明確に指摘するように、ロシアの東方進出は、シベリア侵略だけでなく、アラスカや他の北米地域への勢力拡張すらも、コサックや猟師、商人たちの私的な行為を、政府が追認するという形で進められていたことがわかる。

結局、史料として残されている報告書、調査書には、この会社が儲かっていたかのような数字が残されていたが、実態としては非常に危うい経営が続いたことを知ることができる（172–173頁）。アラスカ、アリューシャン列島、千島列島で捕れる毛皮の収益で潤うこともあったが、これらの地域における権益を守るための出費もまた莫大なものだったからである。そこで捕れた毛皮の販路はキャフタ貿易に依存していたが、それは清側の意向でたびたび中断し、また、19世紀にはいるとキャ

フタ貿易における毛皮取引の比重が急速に低下した。しかも、イギリスやアメリカの商船による広東とアメリカを結ぶ太平洋貿易が進展したことから、ロシア・アメリカ会社の毛皮猟とキャフタ貿易に依存する植民地経営は非常に苦しくなり、時にはライバル関係にあるはずのイギリスやアメリカの商船との取引に依存せざるを得ないような状況に陥ることもあった。シェリホフの死後、ロシア・アメリカ会社のアメリカ総支配人として、アラスカにおける植民地経営とその権益の維持に奔走したＡ・Ａ・バラーノフの苦闘を描いたのが第 5 章である。

1818 年のバラーノフ引退はロシア・アメリカ会社の一つの大きな転機となった。バラーノフ以後の総支配人は海軍士官が就任することになり、それ以降国営会社としての性格を強めていく。この国営会社化したロシア・アメリカ会社のその後の動向と終焉を描いたのが第 6 章である。

著者によれば、国営会社化したロシア・アメリカ会社の経営環境は、世界的な毛皮交易の衰退によって悪化の一途をたどった。キャフタ貿易における取引の品目は 1820 年代から変わり始めており、毛皮の輸出が 1824 年をピークに減少に転じ、逆にそれまで中国からの輸入品目だった綿織物の輸出が拡大する。またロシア側が輸入する主要品目も、中国製の綿製品から茶へと変貌する（175 頁）。そのような情勢の中でイルクーツクの毛皮商人たちも衰退し始めるが、それでも毛皮貿易に固執していたところに、ロシア・アメリカ会社の限界があったようである。1830 年代には、当時北太平洋で隆盛を迎えた捕鯨にも手を広げようとするが、結局うまくいかなかった。

ロシアの北太平洋政策は 1840 年代になると変化を見せ始める。1847 年にシベリア総督となったムラヴィヨフはアムール川流域へ河口から接近を試み、1850 年代に入ると着々と流域に橋頭堡を築き、同時にサハリン（樺太）にも進出する。ロシアは 1858 年のアイグン条約と 60 年の北京条約によってアムール川左岸とウスリー川右岸以東の広大な土地を領有することに成功した。ロシアの勢力拡張の方向がアメリカから東アジアへと転換されたわけで、江戸幕府の日本との国交樹立もその過程で達成されたものだった。そのような情勢の中で、ロシアではアラスカ放棄論が台頭する。それには毛皮貿易衰退に伴うロシア・アメリカ会社の経営悪化と植民地の防衛上の問題が関係したといわれる。結局、1863 年にロシア・アメリカ会社は営業停止となり、67 年にアラスカがアメリカ合衆国に売却された。本書は、16 世紀以来続いた毛皮貿易を柱としたロシアの東方進出が終焉を迎え、帝国主義的な世界分割へと向かうところで終わっている。

本書で扱われたロシアの東方進出、キャフタ貿易、アラスカ植民地建設などの諸問題はすでに東洋史学やロシア東欧史学でしばしば取り上げられてきた。本書の記述もそれら先行研究によるところが大きい。また、ロシア・アメリカ会社の歴史に関してはロシアだけでなく、アメリカでも研究が盛んで、数多くの研究書が刊行されている。しかし、イルクーツク商人の動向を真正面から取り上げ、それを核にしてシベリア産毛皮のヨーロッパでの取引、キャフタ貿易、そしてアラスカ植民地建設の過程を描こうとする試みは、日本では本書が初めてだろう。ヨーロッパ、キャフタ、アラスカでの毛皮交易の動向が、イルクーツク商人を中核にして相互に有機的に連関していることがみごとに描かれている。評者も東北アジアにおける毛皮と絹織物を媒体とした商取引の問題に取り組み（佐々木 1996、1998）、北太平洋におけるラッコの毛皮の取引の問題について研究に接する機会も多く（大塚 2001、2003）、その過程でイルクーツクがシベリア、アラスカ産の毛皮の取引の中心地であることは知ってはいたが、その商人たちの実態はなかなか知ることができなかった。著者はイルクーツクに留学し、またモスクワ、サンクト・ペテルブルクの古文書館で研究を続けて、一次史料にアクセスすることでその実態を詳細にわたって明らかにしてくれたわけで、その意味でも本書の意義は大きい。

ロシアの研究者あるいはロシア史を専門とする歴史学者は往々にして、ロシア帝国の東方進出をロシア国家の輝かしい発展史として描いてしまい、侵略され、征服され、搾取された側の視点が欠けていることが多い。しかし、本書の著者はラッコ猟に徴用され、搾取され、またロシアの植民者に対して反撃を行う住民側の事情も考慮しつつ、シェリホフやバラーノフらのアラスカ経営の実態を明らかにしようとしており、中立的な立場を保ちながら、多角的な視点で歴史を描こうとする姿勢も評価できる。また、政治的背景があるために、日本の研究者が視点の中立性、多角性を保証できない日露関係史と北方領土にかかわる問題には深くこだわらず、ロシアの東方進出史の導入部として、冷静に記述している点も評価できる。それは、一つの事実に対して、多様な視点で記された多種類の史料をつかって相互検証するという、歴史学の基本的な研究方法を忠実に実行しているからである。

とはいえ、本書にも若干の問題がないわけではない。

大きなところでは、本書の全体のバランスの問題がある。著者がイルクーツク商人とロシア・アメリカ会社の盛衰を柱にして本書を組み立てている点は高く評価できる。しかし、最後の第6章が中途半端な印象を受ける。つまり、ロシア・アメリカ会社の終焉の歴史の記述に物足らなさを感じる。バラーノフ亡きあと、国営会社として、イギリス、フランスが主導する近代的植民地争奪戦に参入しつつも、重商主義的な毛皮交易に固執し続けたのはなぜだったのか。また、捕鯨など新しい試みに手を出すものの、会社もロシア政府も結局アラスカの植民地は守り切れなかった。チュコトカ、カムチャツカを確保していたロシアが、なぜアラスカを守り切れなかったのか。なぜその侵略の矛先を、政治的、軍事的により難しい東北アジアあるいは東アジアに向けたのか。そして、なによりもロシアが重商主義的な植民地経営から、帝国主義的な世界分割へとどのように世界戦略を転換したのか（ロシア•アメリカ会社の解散もこの政策転換の結果ではないだろうか)。これらの諸問題について、著者の見解を聞きたかった。ただし、これらの問題はロシア近代史研究のテーマとしてはいずれも大きいものであるため、それだけで本1冊分となってしまうだろう。著者の今後の活躍に期待することとしたい。

細かい点では、いくつか勘違いと思われる間違いが見られる。例えば、14頁で安政5年(1858年)に締結されたアメリカ、ロシア、イギリス、フランス、オランダなどとの修好通商条約の締結が物価上昇と政情不安引き起こしたという部分で「……蛮社の獄、桜田門外の変と、国内の政治不安を示す事件が連続して起こるが、……」と記しているが、「蛮社の獄」は「安政の大獄」の誤りである。前者は天保10年（1839年）に起きた蘭学者弾圧事件であり、尊王攘夷派の弾圧は大老井伊直弼が行った後者である。もうひとつ、細かいところでは、50頁でふれられているE•ハバーロフのアムール遠征のところで、ハバーロフが立てこもり、1652年に海塞率いる清と地元住民の連合軍を破った場所である烏扎拉村のふりがなが「ウラジャイ」となっているが、これは「ウジャラ」の誤りである。この場所はハバーロフの記録ではアチャンとされている。後にロシアの民族地理学者ポレヴォイの研究で、現在のハバロフスク地方アムール地区のアムール川左岸にあるオジャル・ホンコニと呼ばれる場所（ボロン湖の出口の近く）と推定されている（Полевой 1960)。

ただ、本書のような大作となると、このような小さなミスはどんなに注意深く見ていても見逃されることがあり、そのようなことで本書の価値がいささかも減じることはない。本書はロシア史だけでなく、アメリカ史、東北アジア史、日本北方史、さらには毛皮貿易史、北方先住民族研究などを専攻する研究者、学生にも必読の書である。

文　献

秋月俊幸
1994 『日露と関係とサハリン島　幕末明治初年の領土問題』筑摩書房
大塚和義編
2001 『ラッコとガラス玉　北太平洋の先住民交易』千里文化財団
2003 『北太平洋の先住民交易と工芸』思文閣出版
木村和男
2002 『カヌーとビーバーの帝国　カナダの毛皮交易』山川出版社
2004 『毛皮交易が作る世界　ハドソン湾からユーラシアへ』岩波書店
2007 『北太平洋の「発見」毛皮交易とアメリカ太平洋岸の分割』山川出版社
佐々木史郎
1996 『北方から北交易民　絹と毛皮とサンタン人』日本放送出版協会（NHK ブックス）
1998 「18、19 世紀におけるアムール川下流域住民の交易活動」『国立民族学博物館研究報告』22 巻 4 号 pp.683-763
和田春樹
1991 『開国　日露国境交渉』日本放送出版協会（NHK ブックス）
Полевой, В. П.
1960 О местонахождении ачанского городка. *Советская Археология* 1960 №.3